

団地 × 大学

with Public

“団地×大学”が面白い！ 人口減少と超高齢化社会の中で、あたらしい形の“多世代交流”がスタートしています。学生が団地の中でどのような体験をしているのか？ 受け入れる自治会側や住民の方々はどうか連携しているのか？ 団地を舞台に様々な取り組みを実践者に迫ります！

シニア世代の住民にとっても、学生たちにとってもお互いにメリットのある“場”のデザインについて、対話の時間をお届けします！

Guest



神奈川大学 サッカー部監督

大森西三郎さん

Guest



東京工芸大学工学部教授

森田芳朗さん

Guest



隼ファシリティサービス株式会社

田中隼平さん

各ゲストの皆さんのプロフィール活動紹介は裏面へ！

with 
Public
ってどんなイベント？

with 
Public
Kosha33 talk session

「Public」は誰かが何かしていたり、誰かと出会ったり、つながったり、また自分自身もその場に入り、何かをすることが許された場。

「with Public / Kosha33 talk session」は、まちづくり、暮らしづくりにおける、イノベーター、パイオニア、有識者の方と【これからの暮らしを考える】を基本テーマとした対話の時間として神奈川県住宅供給公社と関内イノベーションイニシアティブが協働で不定期に開催するイベントです。毎回さまざまなゲストをお招きして、皆さんと一緒に学び考えながら、みんなが笑顔になれるような、街と暮らしの未来を探るトークイベントを開催していきます。

3/23 (月)
14:30-16:30

入場無料
(受付 14:00)

会場は **Kosha 33**

イベント参加申し込みはこちら▼

<https://x.gd/VGbw3>

- ・ 定員になり次第、申し込み受付を終了させていただきます。ご了承ください。
- ・ 記録・広報、また動画配信を行うため、イベントの様態を撮影いたします。これらの画像・動画は、公社や関連団体の取組み・事業紹介として、WEBやSNS、各種媒体で使用・掲載させていただきます。ご了承ください。

日本大通りで会いましょう！





団地を学びのフィールドに ——大学と地域が育てる " 続く関係 " ——

東京工芸大学 工学部 森田 芳朗 教授

2018 年から始まった「ミドラボ」は、東京工芸大学と神奈川県住宅供給公社が連携し、厚木市の緑ヶ丘団地を舞台に取り組んでいる実践型プロジェクト。

建築やデザインを学ぶ学生が、地域住民との交流を通じて教室では得られない学びを深めています。仕掛け人である森田教授に、プロジェクトの立ち上げ背景から教育・研究、これからの展望について話をお聞きしました。

神奈川県住宅供給公社との連携は、2017 年に声をかけていただいたことがきっかけでした。私自身、学生時代から集合住宅や団地を研究テーマにしており、福岡の公団住宅で育った「団地育ち」でもあります。子どもの頃のにぎやかな団地の記憶が原体験としてあり、暮らしの現場と自然に関わる取り組みに魅力を感じました。学内で関心のある教員とともにゼロから検討を始め、2018 年に緑ヶ丘団地を舞台とした教育・研究プロジェクト「ミドラボ※」を立ち上げました。設計課題として団地のリノベーション提案に取り組み、成果を団地内で展示するなど、現場に出る実践を重ねてきました。

団地は高齢化や空き家など社会課題が先行して現れる一方、住民の知恵や関係性が残る学びの場でもあります。学生は当初、団地に距離を感じがちですが、住民の方と話し、場づくりに関わる中で意識が変わっていきます。年齢や立場の異なる人と関わる経験、失敗も含めた実体験が、学生の成長につながっていると感じます。

活動で大切にしているのは「楽しむ・開く・つなげる・続ける」。空間を開く取り組みや表現活動を通じて団地の風景や空気が変わり、住民の前向きな反応も得られました。団地は地域の資産であり、大学単独ではなく公社との協働が継続の鍵です。今後は集会所の活用や見せ方の工夫を進め、誰もが立ち寄れる居場所づくりを目指しながら、団地とともに変わり続けたいと考えています。

※ミドラボ：学生による設計・提案：建築や都市デザインを学ぶ学生が、団地の空き家や集会所のリノベーションプランを具体的に設計・提案。「団地活性サポーター制度」では、学生が団地に居住し、活動に参加。団地集会所を「ミドリバ」（集会所を「みんなの居場所」としてオープンする取り組み。緑ヶ丘団地の『緑』と、居場所の『場』を組み合わせた言葉）として開放し、学生が地域住民と交流する場を提供したり、イベントを開催したり地域コミュニティの活性化を目指しています。また、マンガや映像などのアートの力を活用し、団地や地域の魅力を発信する広報活動も行っている。国土交通省のモデル事業に選定されるなど、具体的な成果を上げている。

これまでの取り組み・活動は「ミドラボイヤーブック<電子ブック>」で紹介しています。▶



1973 年福岡県生まれ。1998 年九州大学大学院工学研究科修士課程修了。2004 年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。博士（工学）。現在、東京工芸大学工学部教授。専門は建築社会システム、集合住宅、団地再生、空き家活用など。現在、東京工芸大学工学部教授として、建築・都市分野の教育・研究に携わる。主な著書に『図表でわかる建築生産レファレンス』『箱の産業：プレハブ住宅技術者たちの証言』など。共編著書『建築・まちづくりのための空き家大全』は、公益社団法人日本不動産学会の 2024 年度著作賞（実務部門）を受賞。



①井戸端会議や交流ができる場所として、集会所の近くのプレイロットにリングベンチを設置（設計：建築コース田村裕希研究室）②2022年11月に行ったオープンストリートの実験（「オープンストリート構想」フェンスなどで分断された団地や住宅地の屋外空間を「開いてつなげる」ことで、新たな道空間や交流の場を創出し、住民のつながりや地域活性化を目指す取り組み）。地域の方にも協力いただき、様々な声をいただきました。構想が徐々に現実になってきています



神奈川大学 サッカー部 大森西三郎 監督

サッカーの技術や勝敗だけでなく、人としてどう成長するか——。

大森監督は、学生アスリートの育成において、その視点を何よりも大切にしています。その実践の場として選ばれたのが、神奈川県住宅供給公社の竹山団地（横浜市緑区）。

今回は、大森監督に、団地で活動することになった背景や、地域との関わりの中で生まれた学び、そして今後の展望について話をお聞きしました。

団地の課題が、学生の学びに ——サッカー部と地域が育ち合う場所

サッカー部員が団地で暮らす取り組みは、公社と団地再生に取り組む原大佑さんとの出会いがきっかけでした。公社の二宮団地（中郡二宮町）とその周辺地域で農や食、里山や遊びをテーマにした暮らしを提案するさまざまな活動を展開されていることに驚きました。私自身も以前からその取り組みに興味を持ち、話を聞く中で、原さんの「団地は未来社会の縮図だ」という言葉が強く印象に残りました。これから高齢化社会が進む中で、団地は学生の学びの場になるのではないか。そんなイメージが湧いたんです。その後、原さんから公社職員の方を紹介してもらい、立地や環境の面から竹山団地を提案していただき、公社の紹介で竹山団地を訪れ、自治会や公社の方々とは協議を重ね、2020年に公社と大学で連携協定を締結。サッカーと地域活動を両立する暮らしが始まりました。

以前から、集団生活の中で人間的成長を促したいと考えていました。団地が抱える社会課題そのものが、若者にとつ

て価値ある学びのフィールドになると捉えています。

当初は戸惑う学生もいましたが、清掃やスマホ教室、商店街の空き店舗を活用したカフェ運営などを通じ、地域との関係が深まりました。関係性は自然に育ち、住民が試合を応援に来るほどに。団地での共同生活と地域での役割を通じて、学生は人と関わる力や責任感、調整力を身につけ、競技力や就職にも良い影響が出ています。

今後は子どもたちの居場所づくりにも力を入れ、学生・子ども・高齢者が交わる日常を積み重ねることで、「ここで暮らしたい」と感じる人が増える団地を地域とともにつくりたいと考えています。



取材の日は竹山セントラルでサッカー部2年生（弱冠20歳！）が指導者となって「レッドコード」（天井から吊るされた赤いロープを使って身体の一部を支えながら行うトレーニング）のプログラムを行っていました。参加者も熱心に話を聞きながらトレーニングしていました。

1969年神奈川県生まれ。中央大学を経て海上自衛隊に入隊後、厚木基地などでプレー。全国自衛隊サッカー大会や国体で全国優勝。引退後、2004年神奈川大学サッカー部監督。その後、2008年神大を関東1部昇格に導く。神奈川大学大学院を経て湘南ベルマーレ、星槎グループで地域スポーツ振興に携わり、2019年4月から神大監督に復帰。現在は神奈川大学スポーツセンタースポーツ戦略室専任職員としてサッカー部監督を務める。



①横浜市緑区中山にある神奈川大学のグラウンド。朝練を終え、授業や竹山での活動など、1日が始まる ②竹山キッチンでは学生やコーチが調理担当やホール担当など役割分担し、運営 ③夕方には学校から帰ってきた小学生の宿題をみる場面も。今では日常の光景となっている



隼ファシリティサービス株式会社

代表取締役 田中隼平さん

団地やマンション管理において、清掃員などを地域から雇用する取り組みを起点に、団地という生活の現場で「共創」を実践している田中隼平さん。その経験を生かし FM ラジオ番組「サーキュラーエコノミー Plus チャンネル」の MC も務め、団地再生や活性化に取り組む方などを数多くゲストに迎え、お話をしています。団地管理における雇用創出、住民間の合意形成の難しさ、多世代共生のヒントについて現場での実感をお聞きました。



団地の現場から見える「共創」のリアル

——地域をつなぐ現場の話

分譲団地やマンションで清掃などを行う管理会社を運営し、「雇用のつくり方」に特徴のある取り組みをしています。管理物件の居住者や地域の方を中心に、高齢の方や、これまで就労の機会に恵まれなかった若者にも現場で働いてもらっています。正直、こうした取り組みは大きく儲かるものではありませんが、人が地域の中で「働く喜び」が持ってもらえる仕組みそのものに意味があると感じています。清掃は単なる作業ではなく、住民同士が顔を合わせ、ちょっとした変化に気づく“見守り”のきっかけにもなります。一方で、住民だけ、外部だけではうまくいかず、当事者性とプロの視点のバランスがとても重要だと感じています。

公社の取り組みのように団地に若者が住み、自治会活動や地域に関わることで、団地の雰囲気は確実に変わると感じています。高齢者の方の中には変化を嫌う方もいると思いますが、実際に若者が目の前で活動している姿を見

ると、印象がガラッと変わることも多いようです。

若者が団地で共存していくために必要なことは「自然に溶け込む」ことだと感じています。丁寧な対話を前提にしつつも、実際には多少強引になる場面もあり、どこかで“勢い”も必要になると考えています。高齢化や空き家が社会課題となる中、正解や成功の形は一つではありません。まずはやってみて、試行錯誤する。試す価値は十分にあると感じます。共存は理念ではなく、実際の行動の積み重ねでしか生まれません。



毎週金曜日の 11 時から放送の金沢シーサイド FM「サーキュラーエコノミー plus チャンネル」。「サーキュラーエコノミー plus」を切り口に、毎回ゲストの取り組みについて何う内容で、田中さんは MC を務めています

番組サイトはこちらから▶



1995 年季れ。明治大学を経て出光興産（株）に入社し、2023 年に独立。団地や地域内の潜在的な労働力を「清掃」という形で雇用し、働く意欲が強い高齢者を中心に団地や地域内で循環経済を実践している。循環経済・サーキュラーエコノミー Plus の実践者として金沢シーサイド FM「サーキュラーエコノミー Plus チャンネル」の MC パーソナリティを務めるほか、一般社団法人横浜青年会議所 サークュラーエコノミー部会に所属するなど、横浜市内の多様なステークホルダーと連携したまちづくりを推進している。

WEB サイト「Kosha33 ジャーナル」では、会社の「コミュニティづくり」「団地コラム」「会社のこと」など取り組みやイベント告知やレポートなどを配信しています。ご覧ください。

神奈川県住宅供給公社の本社ビル 1 階にある情報発信拠点「Kosha33」は、地域や子育て支援、日本大通りの活性化を目的に、さまざまなイベントを開催しています。コワーキングオフィス、パン屋さん、本屋さんも併設され、多くの人が集まる場所となっています。ぜひ足を運んでみてください

